

# デジタルでは置き換えられない、人間ならではの強み。

これからは珠算を学ぶ技能の上達にしろ、あるいは概念の形成、学習員として活用するにしろ、その学ぶ過程で鍛えられるより汎用性の高い資質とか能力、目標を設定して、それを実現するために粘り強く頑張る。それによって成就感をもって次にチャレンジしていくというようなことは、珠算の学習に固有の問題ではないんですけれども、学びに対する重要な構えと云いますか、態度として他に及ぼす大きな影響を持つ可能性が出てきていると思えます。そのことに対する関心が、これからの教育で高まっていると言えらると思います。つまりデジタルでは置き換えられない、人間ならではの強みですね。目標を自分で決めてそれを解決し、新たな課題を見つけて前進する。そこにシフトされていますので、第一義的な珠算そのものにかかわる部分だけではなく、その学びを通して形成される第二次的なものに、対峙していくというふうなことも努めて見ていただきたいと思います。



清水 静海  
帝京大学 大学院 教授、  
研究科 研究科長

# 第29回学術顧問会議 「新しい時代の教育とそろばん」



第29回学術顧問会議が令和3年11月7日、オンラインで開催された。総合同会の小沼光浩珠算教育研究所研究員による学術顧問及び連盟役員との紹介に続き、澤田悦子理事長が挨拶を述べ、澤田悦子所長より趣旨説明がなされた後、上野雄大研究員の進行によって会議が開始された。

今回の学術顧問会議は、コロナ禍が続く中で初のオンラインでの開催となった。メインテーマは「新しい時代の教育とそろばん」。コロナ禍において新しい生活様式、ニューノーマルが提唱される現代をテーマに反映させた。

会議は学術顧問による3分間スピーチを交えながら、「①これからの学校教育・②これからの珠算教育」の二つの議題について、オンラインとは思えぬほどの熱のこもった議論が交わされた。

冒頭、工藤理事長が挨拶の中で、コロナ禍によって前回の学術顧問会議が開催された2年前とは教育環境が激変したことにふれ、「困難を乗り越える力、問題解決力が子供たちなりに育まれたのではないかと述べた。

会議では、コロナ禍でオンライン授業への取り組みやGIGAスクール構想が学校現場で急速に進んだことと頭になった功罪について各顧問より様々な意見が出され、これからの学校教育、珠算教育への議論に繋がっていった。

【詳細に関しては珠算春秋106号に掲載】



※公益社団法人 全国珠算教育連盟発行「珠算春秋」106号の記事より発言を抜粋し、編集・加筆のうえ掲載しています。

# 興味や関心を持つと一生懸命になり、エネルギーになる。

私はずっと前から、例えば「やりたいことあるの?」と聞いています。子供にも。これやりたいと言えれば、それをまっすぐやらしてみます。

私は珠算教育に、ずっと長いこと関わっています。皆さんも、塾に入ってきた子供さんに、どうして塾に入ってきたの?と聞いています。親に勧められて来たという人もいれば、数が好きで入った人もいます。そして、やってみて何が楽しかったか、面白かったのかと聞いて、興味を引き出していると思えます。いつの時代でも、小さい頃から数や文字に親しんで育った子供は、さらに、興味が広がります。

指を動かすことや暗算も頭の働きを活発にする大切な役割を持って練習してこそ伸びる子とそうでない子がいます。そこにも興味や関心に関わっています。子供は、興味や関心を持って一生懸命になり、集中力も育ちます。この力がこそ家庭や学校での学習や、仲間との活動に積極的に関われるエネルギーになるのです。



中野 靖彦  
修文大学短期大学 学部 幼児教育学科 教授、  
愛知教育大学 名誉教授

# そろばんは精緻な指の運動をしますから非常に大事。

そろばんというのは、かなり微細な精緻な指の運動をしますから、そういうのは非常に大事で、言葉をつかさどる前頭葉に手の運動をコントロールする部位が生まれて、言葉が発達してきたというふうな考えられているので(小さいときにちゃんと今まで私たちがやっているような形の五感の使い方をおかないと)、その辺りは駄目になってくるというふうな考えられます。

そのためには、タブレットでやる教育ではない、そろばんでやるそのことが、どれだけのいいのかわからない。リモートでも教育のいい面ももちろんありますけれども、ネガティブな面もあるわけで、タブレットでやることについても、いい面もあるけれども悪い面もあるわけです。だから、GIGAスクールの中でタブレットでやるような教育で駄目なところを、珠算ではちゃんと補えるんだというところをもっと戦略として考えるべきじゃないかというふうな、申しあげておきたいと思えます。



八田 武志  
関西福祉科学 大学 学長、  
名古屋大学 名誉教授

# 「新しい時代の教育とそろばん」、何に象徴されるかが問題。

「新しい時代の教育とそろばん」というタイトル、新しい時代というのは何に象徴されるかということが問題であるかと思えます。コロナの問題と学校教育、珠算教育とがどう切り結んでいけばいいのかわからない問題、コロナの後はまだ別問題ですけれども、そういう問題についても考えていかなければいけないと思っております。

(著書『日本数学教育史研究』上巻について) 幕末明治の頃から大体昭和の初め、昭和6年から10年頃までを扱ったものです。

この本の中には幕末明治の頃に西洋算術が入った頃の算術の中の珠算の扱いですね。珠算がどのように扱われてきたのかというところは述べておきますし、それから明治の中頃に珠算復興運動というのがありましたけれども、珠算復興運動についての歩みについても述べておきます。それから初等教育における珠算の変遷ですね。それをずっとたどっていけば分かるようになっております。



上垣 渉  
三重大学 名誉教授

# 学校の先生にもそろばんのよさを分かってもらう必要がある。

私自身の、武蔵野市のピタゴラスクラブIIという算数の教室での実践例をお話しします。

4年生の子供たちで、今の日本の教育で重要な柱の一つになっている、表現力、思考力、判断力、表現力、算数・数学教育、その狙いの中の、またこれも重要な、今の思考力、判断力、表現力、算数・考え方を狙いとする授業をしております。

(問い掛けについての質問に対して) ここでみんなが考えた考え方は、これは前に知っていたこと、前に分かったこと、これと同じようにやるといいんだなという考え方なんだよ。とても大事で、普段の算数の授業でもいつでも使われる考え方なんだよという話を必ずしっています。

(まとめの言葉として) 全珠連の先生方はもっと学校に行ってください。これが具体的に僕は大事だと思う。学校の先生にもそろばんのよさを分かってもらう必要があると思えます。



向山 宣義  
算数・数学教育 合同研究会 相談役、  
武蔵野市教育委員会 生涯学習推進員

# 地域との連携が珠算を発展させていく一つの方法か。

私の母は昨年まで全珠連に所属して珠算塾を開いておりました。そのときには、東京都足立区で、私の母校である地元の小中学校と、それからもう一つ隣の小学校に伺い、珠算の時間の指導をさせていただきました。

私がありがたいと思いましたが、例えば全珠連の足立地区の競技会や、足立区主催のそろばんフェスティバルなどで子供たちが優勝したり入賞したとき、それを学校の全校集会で表彰してくださいました。小学校では、学校内外の子供たちの様々な活動を積極的に認め、表彰して下さっていました。子供たちにとっては、学校という公の場で認められている、学校の朝礼で表彰していただけるというのは非常にモチベーションが上がることだったと思っております。

地元の小中学校や地域の方々との連携というところが、いっそう珠算を根付かせて、発展させていく一つの方法なのかなと思います。



大木 桃代  
文教大学人間科学 学部 心理学科 教授、  
東京大学医科学研究所 非常勤講師

# 電池の要らない計算具の教育、活躍の場は増やせる。

(SDGsとそろばんについて) 目標の4番「質の高い教育をみんなに」ということで、すべての人が取り残さず教育を受けられるような、そういう環境を整えていくというところで、ターゲットの例として、読み書き計算ができるようにするというのがありま

例えば、日本ではどこに行っても電卓なり計算機等があります。海外だと、先進国でない国では電卓が通っていない場所もある。そういうところでもこういう教育を受けられるようにする。あるいは計算力をどうやって高めていったらいいか。そろばんのような電池が要らない、そろばんさえあれば計算ができる、ということの世界中に広められる。そういうことができるんじゃないかなと思えます。全世界へ向けた、電池の要らない計算具の教育、そういうのをやっていくことも必要なんじゃないかなというふうな、思うんですね。活躍の場はどんどん増やせるんじゃないかなと思えます。



渡邊 一衛  
成蹊大学 名誉教授、  
武蔵野市教育委員会

# 小さい時期からそろばんで数を教えることは大事。

IT化の全く逆とは言わなくても、アナログ的なそろばんが、十進記数法などが私たちに分かりやすい形で見えるというところは、本当に貴重なものだなと思っております。ですから、まずまずタブレットやパソコン処理に傾いてきたときに、そろばんって見直される方向にあるんじゃないかな。

(ケイレブ・エウレット著『数の発明』を読んだ) ヒトは、3ぐらいまでは自然に、つまり概念的に分かるのですが、それ以上の数は教えないと身につかないとのこと。その点、そろばんは数というものを目で見て、自然に分かる。人間の感性にうまく入って概念をつくり上げることができる道具なんじゃないか。それを最初からデジタル化してしまうと、概念的なものがないままに、なまじりというところをまますます、この本を読んで考えなければ、大きい数は教えないことは、やはり小さい時期からそろばんのようなもの、数を教えるということは大変なことなんだなというのを感じております。



河野 貴美子  
NPO法人 国際総合研究機構 理事長